



あたたかい医療をみんなの手で

HUMAN

“きみつだより”

鬱金茶(ウコン茶)号

NO.41 平成14年10月21日発行
編集責任者 茅野 嗣雄
編集者 “HUMAN”編集委員会

玄々堂 君津病院 〒299-1144 君津市東坂田4-7-20 ☎0439-52-2366(代) URL <http://www.tokyo-bay.ne.jp/~gengendo/>

変わりつつある玄々堂の医療

変わりつつある日本の医療情勢の中で君津病院の医療姿勢も変わりつつある。診療報酬のさらなる引き下げと患者負担額の増加により、医療の供給者も受給者も経済的に苦しい状態での医療が強いられるようになってきた。その中で医療供給者に大切なことは必要な医療を効率的に供給すること、すなわち医療の無駄をなくすことである。

この実現のために、当院では受給者側(患者さん、地域)の意見と医療現場の意見を取り入れた医療供給を更に推進する動きが出てきた。まず情報企画室の設置による地域のニーズの収集、第一線医療現場の意見が反映される診療検討システムの導入、そして病院情報の積極的な公開などである。

今後は受給者および現場からの積極的な発言とディスカッションが、よりよい地域医療の現実につながるとういよう。



立山に訪れた東の間の秋

当院の感染対策について

看護部感染対策委員長 中田 ひと

近年、院内感染関連の医療事故が急激に増加しています。ニューヨークのある急性期病院での医療事故の原因には、手術時の感染の取り扱いによるものとの報告もあがら

れています。国内でもセラチア菌やレジオネラ菌感染の死亡例が報道されており、医療器具の清潔な取り扱い方法や感染対策の正しい知識が不足しているために生じたものも多々あります。また、このような医療事故の原因が、正しい情報に基づいた予防対策がとられていなかった事により発生してい

ます。当院での院内感染対策委員会では、正しい情報に基づいた予防対策を行なうために、院内感染に対する正しい知識を持つ事を目標として院内感染対策マニュアルの改訂を行いました。改訂したマニュアルの内容は、院内感染を予防する感染経路の遮断の方法や細菌に対する対応方法を明確にして

います。また、院内の感染状況を早期に把握するために院内での届け出や感染調査を行ない、院内で菌が蔓延しないよう意識しています。さらに、入職時におけるオリエンテーションを毎年行なっており、人から人への伝播を防止する重要性を伝達しています。今後も入院生活における患者様の環境の安全を確保できるように常に意識して、活動を続けたいと考えています。

第七回君津市民ふれあい祭り 当院最優秀賞受賞

毎年恒例の君津市民ふれあい祭りが八月四日、盛大に行なわれた。当院より総勢八十名の参加があり、最優秀賞を受賞した。お祭りに来ていた方からは、「最後まで気を抜かずピシッと決めるあの迫力にはまいった」とお褒めの言葉も頂いた。

ケーブルテレビ特番に 当院登場

玄々堂の診療が木更津ケーブルテレビで取り上げられることになった。一回十五分番組六本で、「治療と生活の両立」在宅での医療などのテーマで撮影が行われている。番組タイトルは「玄々堂 活き活き倶楽部」で、地域の人に役立つ医療情報を提供しようというのが目的である。放送予定については病院掲示板などで公示される。(十月第三週 十二時、二十一時、二十三時四十五分 J-COM スペシャルで放映予定)

インフルエンザワクチン接種 十月十五日より受け付け開始

今年も当院では、十月十五日よりインフルエンザワクチン接種希望の受付を開始した。申し込み方法は、受付にて予約をして頂き、接種当日予診表を持参し、ワクチン接種となる。尚、昨シーズンより、六十五歳以上の方は市町村より補助が受けられるようになった為、事前の確認が必要である。(詳細は受付へ)

ドミニカ共和国より 訪問看護見学に

ドミニカ共和国、公立病院の看護師であるアンヘリカさんが、十月二日、当法人の訪問看護を見学された。千葉県では、「発展途上国の援助」を支援しており、その一環として、アンヘリカさんは、本年七

「医療のコスト」について 君津中央公民館にて高田院長講演

九月二十一日、君津中央公民館に於いて、福寿草の会(君津中央公民館活動グループ)の主催により「医療のコスト」について、高田院長による講演が市民を対象に開催された。約八十名の参加があり、講演後には、市民からの質疑応答も活発に行われ有意義な意見交換の場となった。

ふれあい富津 「車いす・トイレマップ」を作成

平成14年3月、富津市車いすの会では、障害者の行動エリアや生活エリアが拡大でき、気軽に外出できることで社会への参加や暮らしやすさが向上したらと願い、障害者トイレの情報を掲載した「車いす・トイレマップ」を製作し、発刊した。既存の情報では、入り口が狭かったり、手すりの位置があわなくて、使用できないこともあったが、車いす使用者とその介護者を中心とした調査スタッフが、寸寸等まで詳細に調べ上げ、現実的に障害者の使用可能なマップを作り上げた。尚、富津市では、同市以外の希望者にも送料相当分の負担で、申込みを受け付けている。

お問い合わせ先
●富津市 市民福祉部 福祉事務所 障害者福祉係
●TEL 0439-80-1260
●FAX 0439-80-1355
富津市ホームページ <http://www.city.futtsu.chiba.jp/>

日本透析医学会学術集会 当院からも出題

七月十九日から三日間、東京品川の国際館パミールおよび高輪・新高輪プリンスホテルにおいて第四十七回日本透析医学会学術集会・総会が開催された。各種血液浄化療法に関連した治療、

当院から二演題発表

大規模地震災害を想定 防災訓練行われる

九月五日、防災週間にちなんで大規模地震災害を想定した防災訓練が行われた。全館一斉放送による大規模地震警戒宣言の発令とともに、入院患者さんの安全確保、救急患者さんの受け入れ準備などを行った。また、地震による火災発生を想定し、実際に火災報知器を作動させた消防署への通報訓練も行われた。患者さんにも協力して頂き、

4Fからの救助袋を使用した避難訓練

まさに本番さながらの防災訓練であった。

中学生による 「職場体験学習」

平成十四年六月十九日、二十日、小糸中学校三名、八月一日、二日、八重原中学校六名、八月九日、周西中学校五名の生徒による「中学校職場体験」が行われた。参加した生徒達は、戸惑いながらも熱心に取り組んでいた。(二面に関連記事)

十年勤続者 ハワイ旅行を楽しむ

九月十六日、二十一日迄、十年勤続表彰としてハワイ旅行を楽しんだ。今年には職員家族を含めて計十八名が参加し、観光やショッピング、マリンスポーツ、ゴルフ等思う存分満喫したひとときを過ごした。(四面に関連記事)

＝広報委員会＝ 活動報告

広報委員会は病院の診療システムや診療方針を地域の方々に正しく知っていただき、上手に病院を利用していただくことを目標としております。最近では外来患者さん向け診療案内の作成を行い、来院された方がお持ち帰りできるようにしました。また病院紹介の感が強かったホームページを、患者さんが使えるホームページに現在改装中で、将来的には各種予約がホームページからインターネットを通じて行えるようにすることを目標に検討しております。

● 外来診療案内

★外来総合案内に常置しております



● ミニコミ紙 ★医療情報コーナーで御覧いただけます



ホームページアクセスは17,000を超えた!
HPアドレス: <http://www.tokyo-bay.ne.jp/gengendo/>

「中学生職場体験」に参加した小系中学校、周西中学校、八重原中学校の生徒さんより、後日お礼の手紙が当院に届いたので、その一部を紹介します。

「いろいろな看護の仕方や患者さんの接し方、臨床工学科の専門的な知識や治療装置などを説明していただき大変わかりやすかったです。」
(泉 誠一さん)

「今回の体験で医師、看護師だけでなく、その仕事を支える方たちもたくさんいるのだとわかりました。体験を通じ『命の大切さ』『人に対する優しさ』はもろもろの存在を知りました。」
(茂木翔子さん)

「今回の体験でナースエイドさんの存在を知りました。」
(後藤祐希さん)

「貴重な体験を生かして、もっと医師について深く考えてみたいと思うようになりました。」
(安藤嘉将さん)

中学生「職場体験学習」に参加して

● 小系中学校

「実際にやってみないとわからない貴重な体験をさせていただきました。ありがとうございました。」
(田丸好昭さん)

● 周西中学校

「病院内の仕事などが良くわかり、将来の夢を考えるきっかけとなりました。」
(宮 里美さん)

● 八重原中学校

「働くことの厳しさ・喜びがわかりました。」
(鈴木菜津実さん)

● 八重原中学校

「働くことの厳しさ」「つらさ」「喜び」などほんの少し自分自身で体験しました。」
(園田真菜実さん)

関連施設紹介

その3

坂田クリニック



坂田クリニック全景



明るく、きれいな2階透析室

坂田クリニックは、本年度開院五年目を迎えました。これまでの歩みを紹介致します。君津病院から分離し、外来患者様を中心とした透析治療を開始したのが平成十年二月でした。開院当初より、二階のほとんどは、ベッド数四十三床の透析室が占めておりますが、平成十四年十月一日現在、二〇四名の患者さんが透析を行っております。

翌三月、同施設内に君津訪問看護ステーションが移動、そして腎臓内科外来診療が始まり、現在では、火・木曜日の午前午後、透析室が稼働しております。



広がった2階待合室

さらに、今年五月から一階部分の改装工事に着手し、六月に完了致しました。改装内容は、前号と重複致しますが、診察室・レントゲン室・検査室・事務室の移動拡充で介護用品店は近傍へ移転しましたが、同施設と緊密に連携を図っております。更なる施設の充実を得て、より一層、患者様からのご意見・ご要望に的確に答えられると共に、良い透析と医療環境を整備し提供すべく、スタッフ三十八名一同、日々努力致します。

君津市東坂田
坂田クリニック
四丁目八番二十号
TEL 〇四三九(五〇)三三三二
TEL 〇四三九(五〇)三三三二
FAX 〇四三九(五〇)三三八八



「パン作り」

調理師 吉田睦子

栄養科に勤め、朝から時間に追われ忙しい毎日を送っていましたが、どんどん仕事の虫になっていく自分も好きです。忙しい中、自分だけの時間を作れないかとよく考えていました。3B体操、水泳、押し花、レザークラフト、パン教室と大忙しの

日々でした。そうして夢中に感じたのがパン作りでした。パン作りは簡単なようで奥が深いのです。粉は新鮮でイーストは活性力のあるもの、材料の計量は正確に、発酵の温度、湿度管理でパンの味は決まります。生地は愛情を込めてやさしく、素早く丁寧に扱い、傷めたり乾かしたりしないようにしなければなりません。本当にパンは生き物です。作り方次第で、いくらでも美味しくなり、上手に焼けたときは無上の喜びを感じさせてくれます。現在は病院でもパンを焼く機会があります。愛情を込めて一生懸命焼いて病院食として提供しています。

このように「パン作り」との出会いで、患者さまから「今日のパンは美味しかったよ!」との一言でもう一人の自分を見つめさせてくれます。我が家の朝の演出は、起き抜けのアメリカンとバターをたっぷりぬったプレッチェンです。素敵なお一日の始まりです。

やむにやまれず一言二言

信頼関係の再構築の為に



名誉院長
高田 眞行

はじめに

どうにも我慢の緒が切れて、つい言ってしまう、やってしまうことを「やむにやまれず」というのである。すでに還暦を過ぎてはるかではあるが、患者―医療者相互の信頼関係のゆらぎの中を迷走しつつ、荒廃から破綻に向かっているかに見える医療文化(医療制度という言葉と区別して使っている)の現在を目的あたりにしては、「横丁のご隠居さん」よろしく、「ま、なんだな、このてな調子でやるわけにはいかないのである。」

＜一＞ マスコミに乗せられるな

今、日本の医療文化は、その主たる担い手である患者、医療者もひっくるめて、マスコミの上っすべりな、記事と論に乗せられて、迷走しているように思えてならない。

イデオロギーを疑え

ある種のイデオロギーは、それを批判することが、ただちに批判者の知的道徳的劣等性の証明になる、という反論不能の構造を持っている。(カール・ポPPER「開かれた社会とその敵」より引用)

プロレタリアという弱者をかかえたマルクス主義と、女性という弱者(一応そういうことになっているが、ホントかどうか私は知らない)をかかえたフェミニズムがその好例である。

「患者の自己決定権」というイデオロギーも、前二つのイデオロギーと、構造的に同型である。それ故に、私のような能天気か、バカ以外はこれに反論しない。賢者の反論を封じた結果、この種のイデオロギーは、いつの間にか支配イデオロギーに変身して、人間の社会関係の成熟を阻害し、歪めることになったのである。(マルクス氏は苦笑し、上野女史は嘔みつくだろうが、私の知ったことではない)

御存知のように、インフォームド・コンセントは、本来、患者―医療者間の信頼関係の確立を意図してのものである。ここから生まれ出て、イデオロギー化されたかに見える「患者の自己決定権」という鬼子がこの信頼関係を損なうことになっては、それこそ、元も子もないのである。

イデオロギーとは、「一歩間違えば、元も子もなくしてしまう考え方」のことをいうのだろう。

インフォームド・デシジョンというアメリカ直輸入の言葉にも一度置きかえるのではなく、又アメリカ型訴訟社会でのように、自己防衛装置におしめるのもなく、患者―医療者間の信頼関係を高めるための装置として生き返らせる動きが、まっとうな医療文化を代表するものとして、今あらためて強く求められている。

この動きは「パターナリズム」や「I・C」や「患者の自己決定権」といった、さまざまな医療のあり方を相対化する「外からの視点」を持ち得ないし、したがって医療のあり方を、医療者と患者間の信頼関係を再構築する血肉を持った実体(現実的なもの)として、定着させる力とはなり得ない。それどころか、一歩間違えば(対抗イデオロギーがいつの間にか、支配イデオロギーに変身してしまうと、逆に相互の信頼関係を損なうことさえ危惧される。

患者さんサイドには、権利意識の肥大化(当院では、患者さんが医療材料や薬剤の種類を指定してくるという事態が現実起こっている)をもたらし、医療サイドには責任意識の変容を結果してしまうからである。マスコミのこの動きは、戦前戦後を通じて彼等に貫して見られる浅薄で上ずりな動きというほかはない。そういったわけで、I・Cを、これを完全に解消することは決して出来ないという事実からも目を

そらさず、この隙間を、何で、どうやって埋めていくのかを考へることが、何よりも大事だ、と言いたいのである。

患者さんに自己決定権があるのは当然である。そのためには情報公開が必要だ。これも当然である。ただ、現場の実感から言えば、患者さんの意志が、信頼関係の基盤に立って、ある内容とある強さを持った選択意志に紆余曲折を経ながら徐々に収斂していくのを、医療者を含めたネットワークが、開かれた対話の回路を通じてサポートしていく、そういった拡がりや厚みを持ったプロセスが大事なことだと思ふ。

自己決定権は、最初からそれだけが宙に浮いて存在しているわけでもなければ、ある一点に屹立しているわけでもない。観念としてではなく、実体としてこれをとらえるならば、このような基盤を持ち、プロセスを持ち、自己責任という裏付けをもつてはじめて、事後的に実在してくるのだと思ふ。

＜二＞ 医療トラブルは何故増え続ける?

人間は生老病死という予測することも出来ない自然の中に生きていく。医療は本来、医療者、患者さん双方がこの事実を充分に理解し、受容した上で始めて成り立つものだ。言ってみれば、これは医療の世界に、医療者として、或いは患者さんとして、入門するに当たっての最も基本的な教養であり必修事項なのである。しかし、現実にはそうはなっていない。残念ながら、日本の社会教育も医学教育も、これを實現する程には成熟していないからである。それどころか、両者共この事実には目をそむけ

て、意識的に忘れようとしてしまっている。

一方、二十世紀の目覚ましい科学の進歩と技術革新の恩恵を享受して、その生活の中から自然が排除された現代の都市型社会(最近の君津市はこの中に入る)では、天災以外のすべての事象は予測可能であり、コントロール可能だと思ふ。ここには、病気がもたらす予測可能でありコントロール可能な管轄という幻想に支配されることは、もはや避けられない。

病気が死が予期せぬ形で訪れた時、これを誰かのせいではないかと気がすまなくなり、結果として、すべての病気が、すべての良い結果を伴わなかった医療行為が、医療過誤として訴訟沙汰になる可能性を秘めてくる。こうして、患者―医療者間の信頼関係は崩れ、その結果としての医療トラブルは、都市化のひろがりと共に、患者―医療者双方が負わねばならぬ必然的な重荷として蔓延してくるというわけなのである。(君津市でも、すでにその萌芽が見られる。)

一方が人間の弱さという本性に根ざし、もう一方は人類(患者、医療者を含めて)が自らの手で造り上げた高度先進社会の幻想がもたらしたものであるからには、誰を責めることも出来ない。医療者患者双方が、先ずはこの事態に正しく向き合うしかないだろう。

医療者が、この事態に向き合っていくべき正しい態度、鍛え上げるべき態度とは何か?

それは、判らないことは判らない、出来ないことは出来ない、治せないものは治せないとはっきり言い切つても、なお、信頼関係を崩さない、強くて、しなやかな説得力を持つことである。そして、病と

死の不条理を思いやる柔かな感性と、ブレのない毅然とした態度が程良くブレンドされた人間の力量といったものが、この説得力を保證するのだと思ふ。

更にもう一つ、医療トラブルを頻発させ、医療を混乱と荒廃に導いている社会的・文化的要因がある。それは、社会人にとって、これ又必修事項ともいえる権利と自己責任、依存と自立、福祉と保険(健保制度e.t.c.)、給付と負担、契約(診療契約)と訴訟、といったことに関して、患者側、医療者側双方とも、驚く程に無知、無理難題だという事実である。(何故こうなったのか、その責任の所在については今回は触れない)

今、最も必要とされるのは、前段で述べた生老病死に関わる医療の本質とか、後段で取り上げたさまざまな社会規範や社会制度に関して、患者―医療者間に共通の理解を保證するようなまっとうな医療文化を育てることである。そして、この作業の中でとりわけ大事なのは、患者さん、医療者の双方が、マスコミが主導する現場知らずの、浅薄な世論や、バランスを欠いた情報に惑わされることなく、この国の医療文化の中に今ポツカリ開いているかすかな隙を、医療現場の中で、地道に少しずつ、埋めていくことだと思ふ。

＜おわりに＞

医療の荒廃と破綻は、医療制度、医療文化の両面から忍びよって来ている。前者は官僚支配によって、後者はマスコミの上すべりな動きによって。そしてもう一つ、すべては医療者の甘えと怠惰によって。今回は、主として医療文化という

切り口から、現場の一医師として、私見の一部を書き連ねてみた。まっとうな医療文化は、結局のところ我々現場の当事者(患者さんを含む)を中心としたネットワークの中で創り上げるしかないし、これが、医療を荒廃から守る最後の砦だと思ふからである。

人間には、自分にとって自明なことは他人にとっても自明であると思ってしまう悪い癖がある。ここまでの文章の中で私の感じ方、ものの見方、考え方は、私にとつては自明なのであるが、今現在を生きている日本の患者さん、ドクター、ナースをはじめ医療当事者の方達、更には、いわゆる学識経験者、法曹界、マスコミの方達(いずれもこのネットワークの大事な結節点となる方達)にとつては果たしてどうなのだろうか。実のところ、この疑問と、ひょっとしたら、彼等には自明でないかもしれないという不安と、一種の苛立ちのようなものが、私に筆をとらせたのである。

しかし、目指すところは一つ、患者―医療者間の信頼関係とそれとセットになった、日本固有のまっとうな医療文化を、再構築することである。ここに取上げた論点に関して、私とは異なったさまざまな考え方、主張が成り立つとしても、その中から医療現場での日常的な行動にリンクする有効で実行的な行動指針を発見することが何よりも大切だと思ふ。そして、それには、お互いの主張や考えを、ネットワークを生かした多方向的なダイナミズムの中で深め合い、鍛え合うしかないだろう。文化にとって、安易な模倣は禁忌なのである。

諸兄弟の、御意見と反論をお願ひしたい。

人事往来

異動

()内は旧所属部署

- 手術室 阿部 美樹 (3A病棟)
3A病棟 勝呂智恵子 (3B病棟)
前沢 淳子 (外 来)
3B病棟 田代 沙織 (看護部長室)
4階病棟 小山 静枝 (4階病棟)
外 来 高橋 恵美 (3A病棟)
透 析 佐藤まゆみ (看護部長室)
木更津クリニック 花田 美紀 (看護部長室)
大内 佳恵 (坂田クリニック)
栗田 志保 (看護部長室)

新入職員

- 看護師 松尾いづみ (9月1日~)
大胡さやか (9月17日~)
坂田 美樹 (10月1日~)
貝原 和美 (10月1日~)
岡部 貴子 (10月1日~)
放射線科助手 佐久間知子 (9月17日~)
クラーク 鳥海 梨加 (10月1日~)
事務部 山上 千尋 (9月24日~)

結婚・出産

結婚

()内は旧日姓

- 平成14年
7月 木村 美聡 (谷 脇)
吉武 由香 (工 藤)
9月 茂田 昌子 (小 番)
10月 内田 茂男

出産

()内はベビーの名前

- 平成14年
7月 板倉 裕子 (夕 奈)
古志由紀子 (華 絵)
8月 山口 亜樹 (藍)
吉田 和世 (廉 司)
山上 聡子 (輝 也)
宮島 雅代 (翔 一)
小川 由紀 (悠 也)
9月 高梨 征子 (洋 樹)
平野 聖浩 (郷 花)

ハワイの思い出

勤続10年間のご褒美に



仕事を忘れて(!?) 幸せなひととき



ハワイで撮影された平野夫妻

楽しみながらの夕食で長い一日が終わり。翌日はやっぱり海。着いた瞬間に買ってきた水着を着てワイキキの裏側にあるカネオヘ湾でジェットスキー・ウィンドサーフィン等を楽しんだ。どこ

は待ちに待ったショッピング。しかし時間が経つのは早く、ハワイ最後の夜を過ごすディナークルーズの時間に。お酒に酔ったのか船酔いしたのかよくわからず丸ごとロブスターやステーキに舌鼓し、ハワイアンショーや夜景を楽しみ、ドキドキ・ワクワクのハワイ旅行が終わってしまいました。「今度はいつ行けるかな?」

その日は夜は全員で食事となっていて、鉄板焼きに、ビールに、そして店員さんのパフォーマンスに酔いしれ(この店はとんねるずも知っている有名な所らしい)、皆でハワイの旅に乾杯した。忙しかった一日を終え、十五階のホテルのベランダで、異常に高いさざり座を眺めながらたばこを吸っていると、いつの間にか頭の中「アロハ・アロハ」といつか習ったあの歌が流れていた。一日目以降は自由行動で、僕たちの家族は買い物を楽しんだり、セスナ機で珊瑚礁を眺めたり、ビーチボートで波乗りしたりと、三日間をあっという間に過ごした。明日は日本に帰らなければ、荷物を整理しながらも、妻は「ハワイに永住する方!」などというテレビを見ていた。そう、ほんとに楽しい、夢のようなハワイ旅行であった。



ハワイの風が身にしみる

病院実習 受け入れ状況

Table with columns: 担当課, 期間, 人数, 学校名. Lists hospital internship assignments for various departments like 看護部, 医事課, 栄養科, 薬剤科.

サブタイトルは "鬱金茶"

過ぎによって疲れた胃腸や肝臓、二日酔いにはウコン茶がおすすめです。ウコンはショウガ科クルクマ属



編集後記

先日、数年間たまった写真の整理をした。とても懐かしい気持ちになった。(生 貝)
秋ですね。季節が過ぎるのは早いものです。一年って早い!! (佐 生)
いつになったら「つり」に行けるのだろう。(平 野)
日焼けしたら肌ボロボロでシミになった。やっぱり若くはなかった。やれやれ。(鈴 木)

外来診療予定表 平成14年10月現在

Table with columns: 日 (月, 火, 水, 木, 金, 土), 時間 (午前, 午後, 夜間), 担当医師. Lists outpatient clinic schedules for various departments.

*予約診療に関しては変更的になりまますので予めご確認下さい。
*外来担当医師診療予定は、毎月月初めに発行されます。詳しくはそちらを御覧下さい。

子供が高窓にある物を何故か持っているのを見て観察すると、重ねた座布団の上に立っていました。(吉 田)
スポーツの秋。今年は柔軟体操!?ががんばるぞ。(寺 坂)
食欲の秋。ひよことすると、ひよことするよ。(山 本)
「えっパソコンたちがあがったの、よかったね。もうすぐ歩き出すんじゃない」という娘の発想に、お腹をかかえて笑ってしまいました。(杉 谷)
焼肉が恋しい秋がやってくる。(山口 曜)
食欲の秋ですね。新米がおいしくって。ご飯サイコー!!(津 田)
「コンビニの割り箸は断らなきて」と、課題の環境問題を調べていた小六の娘に、四RのうちのRを教わった。(住 沢)
空が高くなってきました。どこか遠くに行きたいなあ。(大 崎)
勘違いは、思いやりと思いきみの間に存在する。(山口 稔)